

震災後のみちのくで



■市浜地区の難地。墓石を起こしてけしを供養する風景がある。

五月の連休に、仙台と石巻を訪ね、お見舞いの気持ちを含めて「みちのく八雲会」の皆さんと懇談してきました。回会は二〇〇二年設立。津波から人々を救った庄屋の物語「樞むらの火」(原作者・小泉八雲)の紙芝居(昭和十七年制作)をDVDにして宮城県内の小学校に配布する活動をしてきた。

震災後、自分にできる支援はないかと考え、回会の門閥代表と相談した。「被災した会員がたまにはまともな服に着替えて食事に行かぬか。そんな気もちにさせて欲しい」と言われる。それでお役立てればと思ひ、わずかな義捐金と松江の錦菓、それに被災地で喜ばれるお茶とコトヒトを、八雲会員の協力を得て、キャリトバッグに目一杯詰め込み、みちのくを目指した。

＊

五月三日午後、新宮の新南口から高速バスに乗り仙台をめざす。しかし出発前に「東北道は断続渋滞百キロなので、常磐道を迂回したいが、放射能が気になる方が一人でもあれば東北道を行く」と説

小泉 凡

明があった。一瞬、びくんとして福島県の地図を頭に描く。常磐道をいわきまで北上し、そこから磐越道を北西に向かうルートだ。冷静になって考えれば、一番原発に近い、いわきジャンクション付近でも五十キロ位離れていることを思い起こし、安堵した。結局誰も反対しなかったので予定通りの迂回ルートを進んだ。

水戸の手前から道はバッチワークのように継ぎ接ぎとなり、ものすごい振動が体に響く。日立を過ぎると、太平洋が顔なだし、同時に段丘の上を走っていることに気づく。福島県の道を通るのは約十年ぶり地形のことをすっかり忘れていた。この段丘地形がしばらく続いた後、福島北端部から仙台のあたりまで海岸は平坦な砂浜となり、仙台以北はリアス式海岸に変わる。

このたびの被災地には三つの異なる地勢があり、津波被害も地形によらずいふん違つたようだ。福島原発はこの段丘地形の場所にある。でもせつかく標高四十メートルもある天然の丘を削つて海面に近い位置に掘り下げてつくられて

いる。台地を生かせば、津波の被害はなかったはずだ。などと想像しながら、雨脚が強まり夕暮れがせまる阿武隈山道を北上する。

たつぷり時間を浴びて夜の九時前に長町駅前に着く。ここから仙台市営地下鉄でホテルの最寄り駅をめざす。第一印象は「街が明るく」だった。福島圏は地震以来、駅も車内も街も暗い。下りのエスカレーターは原則、ロープが張られ使用中となつてゐる。仙台では、双方向のエスカレーターが動き、灯りは会館に近い。もちろんランライラインがすべて復旧している今だからこそ明るいのだろうが、皮肉な気がした。街が元気を取り戻している印象だ。

＊

五月四日朝、石巻をめざす。まず、ホテルから仙台駅までキャリトバッグをころがして歩く。昨夜の印象は、思い過こしたことが早くも判明する。JR仙台駅全体がまだシートで覆われ、中に入ると天井にもビニールシートが被せてあった。オープンしている飲食店も、ガラスの扉にはガムテープで補強してあ



■みちのくの玄関、JR仙台駅。シートで覆われている。



■(上段)石巻行きバスを待つ長蛇の列。(下段)JR石巻駅。

が空っぽで出発していくのを横目で見ながら、何で臨機応変な対応ができないだろうかと憤りなく思う。宮城交通たつて被災者なのだから、ここは行政がもう少し他慮から借りてでも動かすべきではないか。

＊

被害の少なかった郊外のショッピングセンター・石巻イオンに門閥代表を含め八名の会員の方が参集してくださいました。そのうち六名

「私は昭和二十三年三月十一日生まれ。夜には誕生日を祝ってもらはずだった。だから三月十一日は私にとつてリセットの日」

「嫌いだつた人が死んでこんなに悲しい。生き方を変えなければと思った」

「近くの学校の三階に避難した。窓にSOS一六〇〇人書いた。自衛隊のへりが降りてくれた。三日間食べ物がかつたが、女子高校生がお金を出し合つてお菓子を差し入れてくれた。嬉しかった」

心温まる羨望も聞いた。「軒居を提出したわけでもないのに、

自宅あての郵便物が避難先の実家に届けられた。近所の人に訊いて届けくれたのだから。日本人は何と勤敏で親切！」

「行政はとりあえず犠牲者の遺体を土葬して、後日あらためて火葬することに決定。棺を十体並べて、まとめて供養する予定だったが、若い僧侶たちが、『それはいい！ 十秒でもいいから一人ずつお経を』と宗派を超えてネットワークをつつて行政に陳情し、個人供養を実現させた」

「アギリスの支援チームに、皇太子の結婚式で帰らなくていいのですかと尋ねると『被災地支援の方がずっと大切だ』



■石巻、みちのく八雲会のメンバーの皆さんと。

る。夜はそういった風景が隠され、ただ照明の明るさだけが際立っていたのだ。やはりここは被災地だった。

石巻や牡鹿半島へは三陸道を通る高速バスが実際のところ唯一の移動手段だ。東塩釜まで開通したJR仙石線に乗り、代行バスで石巻をめざす方法もあるが、国道四五号線は「低速駐車場」と化している。これは論外の方法だ。

石巻行きバス停には発車まで三十分以上あるのに、支援物資を両手にぎげた人たちが五十人ほどが列をつくつて待たされた。その行列は瞬間に二百人近くにも達した。でもバスは一台しか来ない。それも震災前のダイヤで運行している。幸い、私は五十一人目で補助席の前から五番目に座れた。でも百五十人近くが乗れず一時間後のバスを待つことに。怒り出す人もいる。福島行きや一関の行きのバス

までは家も車も失われている。食事をしつつうかつた壮絶な非難体験談を以下に抜粋して紹介する。

「地震当日、石巻線の渡線橋の上で吹雪の中、娘と手をつないで一夜を明かした。通りかかった鯉魚トラックが中身を捨てて、深泡スチロールで囲いをこしらえ、仮設トイレを作ってくれた」

「第二波で家が倒壊し、五匹の猫を失った。べそをかきながら、夫と山路を避難した。姉の嫁ぎ先をめざしたが、暗くなつてきて、心細くなり、まるで胃腸痛心中だった。通りかかった車に手をあげると若い青年で、どこまでも送ると親切切だった。でも彼はガソリンも食料もほとんどなかったので地震直後にコンビニで買ったおにぎりをあげた。親切なコンビニの店員はその五分後に津波で流されたはず。そのことを思い出すと悲しい」

といわれ涙が出た」

「三月十一日を境にみんながやさしくなった」「瓦礫から掘り出された遺体の中に、赤ちゃんを抱きしめたままのお母さんがいて、石巻市民は涙した」

松江大雄寺に伝わる、墓中で出産した母が、幽霊となつて水筒で手を洗う「子育て幽霊」の怪談を思い出した。ハートはこの怪談の再話を「母の愛は死よりも強し」で結び、怪談には必ず真理がある」と説いた。時空を超えた真理(古言)が本当にあつたのだと感

石巻に のんびり雲の かかると

岩田英作

した。

*

その後二人の会員の方の案内で被害の大きかった南浜地区へ入る。見渡す限り瓦礫の原野だ。かつて恐山と佐渡島の間にあった養の河原の風景を原爆投下直後の広島の写真と同時に思い出した。まず日本製紙の工場跡へ。建物の面影さえ全くない。「日本製紙」という看板が辛うじて傾きながら残っている。東日本の新聞や雑誌の紙を、多くここから供給していた。京福線の新聞はすでに薄くなりはじめていた。

行く手には廃墟のような小学校が見える。真っ黒にコンクリートが焦げていた。津波で壊された何台かの車が学校の前でぶつかりあって炎上し、類焼したのだ。そこに隣接する墓地では力割型の墓碑が

倒れていた。でもそれを起こして地蔵やこけしを奉納する風景がみられた。祖先信仰の強さを感じ打たれた。そこで出会った自衛隊員に訊ねると、半は諦め顔で、あと一か月でこの風景を変えたいと希望的観測を語った。この先



■東松島市野蒜地区。美しい松林は沼沢地に。

の津波地区では、地盤が八センチも沈下したため、大潮の今の時期は、日中は浸水するため集落全体が避難している。まだまだ平穏には戻れない現実を目の当たりにした。

さらに、門間代表のふるさと、東松島市の野蒜へ向かう。驚いたことに、この付近ではJR仙石線の線路や駅や踏切が痕跡さえもなくなっていた。門間さんもご実家を失われた。海岸の美しい松林はロシアナのバイエー(沼沢地)のごとく潤った湿地と化していた。しかしそこから蛙の音が！新しい命の力強さに嬉し涙が溢れる瞬間だった。

仙台にもとどろと喉の痛みを覚えた。瓦礫の中の空気を吸い込んでしまったせいだろう。南浜で出会った自衛隊員が、皆、スリーエムの防毒マスクをしていた意味が領けた。

*

五日、仙台では八人の会員の方にお会いした。「福むらの火」のCD作成時にナレーションを担当したアナウンサーの高杉さんのお話。「地震当日、海岸に近い宮城野区で新社屋オープンのためにゼミニートの司会をしていた。その社屋は一時間後に津波でなくなった。」

松江の八雲会が三月末の時点で、ウェブ上で募った義捐金を五つのく八雲会に送金したところ、その一部で門間代表はただちに洗濯機を購入し、会員がリーターをつとめる石巻高校の避難所へ運び込む。三二二六分の洗濯にフル稼働した。



■八雲会の義捐金で買った洗濯機。

石巻は次の復興段階に入ったため、その後洗濯機は気仙沼の避難所で活躍している。日本赤十字や行政に寄せられた義捐金は、六月下旬時点でまだ三割しか還元されておらず、七割はプールされたままだ。住民の不満が募っている。

みちのく八雲会には、他にも、昨年「ハートの神在月」小泉八雲の会＆ミュージアンズの未来を語るサミット」に松江に集った各地の関連団体から支援の手が差し伸べられている。緩やかなネットワークが自然に形作られたのだと想像する。サミットの成果が機能したことがわかり、とても嬉しい。

気になるのは、被災地の行政と避難所運営や被災地支援の実務に携わるNPOとの温度差だ。みちのく八雲会には門間代表はじめ、NPOのリーダーや避難所

運営に携わる会員が多くいる。最近では、行政から面会さえも拒否されると不信感や疎むにする。ボランティアの不足も悩ましい。避難所暮らしが長く続いた子供たちは、夜泣きやおねしょまで「周囲に迷惑がかわかると親に叱られ続け、萎縮していつそう不安定になっている。時々西日本の大学からやってくるボランティア学生が避難所を訪れると、子どもたちは抱きしめて離さない。その写真をたくさんみせてもらった。思ひやりハゲし、遊んでもらえるお兄さん、お姉さんが真に求められている。とにかく、今、間接的でもいかに自分の立場でできる支援をするしかない」と改めて強く思った。

*

「瘦せたくても瘦せられなかったのにみんな瘦せちゃったね」でも「きれいなさっぱりなくなつてすっきりした。ものを追いつめ求める価値観は自然になつた」と、石巻で出会った六十代の人たちは、あつげらん口にされる。複雑な思いを受け止めて帰したが、私自身は出発前より精神的に元氣になつたような気がする。それは、生死の境を生き延び、力強くシンプルライフを送る、人間本来の営みのあり方を垣間見たからだろう。こしげみ、ぼん、総合文化学科教員*民俗学)



■石巻に持っていった絵本たち。

二〇二一年六月十八日、十九日の二日間、宮城県石巻市内の避難所を訪れ、子どもたちに絵本を届け、読み聞かせの活動を行なった。島根県立大学松江キャンパスには絵本専門の図書館「おはなしストーリーライブラリー」がある。このライブラリーでは、西日本から被災地の子どもたちに絵本を届ける活動を四月から行なってきた。多くの一般の方々から四千冊を超える絵本の提供を受け、仙台のNPOを通じて東北地方の被災地に届けることができた。この活動に取り組むうちに、絵本を送るだけでなく、自分

自身、被災地に行つて子どもたちと直接向き合い、絵本を読みたいと思うようになった。そんな折、先行して被災地を訪問された小泉先生のご助力を幸い得ることができて、今回の石巻行は実現した。

読み聞かせよりも

僕が現地でお世話になつたのは、NPO石巻こども避難所クラブ「にじいろクレヨン」代表の柴田潔純さん。柴田さんご自身も家が流され避難所生活を経験した被災者のひとりだ。柴田さんは画家で、四月には仙台市内で個展を開催する予定



■子どもたちと遊ぶニナさん(右)とローラさん。

だったが、津波で抽いた絵がごっそり流されてしまい個展どころではなくなつてしまった。石巻での二日間は、柴田さんのほかに、ボランティアで来ていたアメリカ人の女性ふたりと同行した。ひとりさんは、もうひとりは大阪大学で日本の近代文学を学んでいるローラさん。ニナさんは、石巻での支援は今回で二度目ということだった。ふたりは小さな部品をた

くさん持つてきていて、それらを組み合わせると、人形や綺麗な飾りが出来上がるのだ。避難所の子どもたちも、特に女の子たちが夢中になつて部品を組み合わせていた。僕も子どもに混じつて犬を一匹こしらえてみたが、それがなんともさえない表情の犬になつてしまつて、ニナさんから「へんな犬ね」と笑われてしまった。石巻市内にある避難所は僕が行つた時点でも九十箇所以上にのぼる。そのうち、四人が二日間まわつたのは被災者宅も含めて九箇所だ。最初に向かったのは石巻高校内にある避難所だった。僕の事前の想像では、大勢の子どもたちを前に絵本を読み聞かせるシーンをイメージしていたのだが、現実はそのうわけにはいかなかった。この日は震災で止つた方々の百々日の法要にあたり、石巻でも大きな慰霊祭が開催され、避難所の方々の多くもそこに出席しておられるということだった。部屋の中には子ども姿が見えず、すると校庭に三人のおびつ子がいた。見つけるやいなや柴田さんが走りだし、いきなり追いかけつこの始まりで



■石巻駅前て柴田さん(右)と。



■(上段)石巻で最初の読み聞かせ。(下段)少年と風船のキャッチボール。後方右手、筆者。



■海岸沿いは、この風景が延々と続く。

ある。さて次は野球、次はサッカーと、事の成り行きに戸惑いながら、絵本を入れたトランクはとりあえず校庭の隅に置いて、汗まみれ砂埃まみれで走り回った。二十さんとローラさんのふた人も、もちろんいっしょだ。子どもは至近距離から遠慮なくボールを蹴るものだから、それが時々からだにあたって、ふたりは大騒ぎをしていた。「この子に絵本を読んでもやってください」柴田さんは絵本を読まないで僕を気遣って、ひとりの男の子を連れてきてくれた。さびいよいよ石巻で最初の読み聞かせである。僕が読み始めると、男の子も喜んで聞いている。次第にこちらも調子が出てくる。と次の瞬間、男の子はボール蹴りをしている仲間のもとへ走り去った。僕は読み終わっていない絵本を閉じた。

その後まわった避難所でも、基本的にはこれと似たり寄ったりだった。僕は子どもたちと走り、つかまえてこちらよこちよをし、ボールを蹴り、投げ、ぶつけ

る。追いかけて、また追いかけて、そしてほんのひととき、絵本を読んだ。僕はかなり早い段階で絵本の読み聞かせにこだわることはしなくなった。子どもにも無理やり絵本をおしつけるなんて馬鹿げているし、それに、絵本を介さなくても、子どもたちと僕のあいだに何か通い合うのを感じる事ができた。子どもが風船に水を

突然風景が変わる

石巻に向かった初日のことだ。仙台市内からバスで石巻に入り、最初の停留所があるイオン石巻ショッピングセンターが見えてきた。松江のイオンよりもはるかに大きな施設である。乗客の多くがそこで下車する。若い女性が多い。時間帯からして、イオンで働いている人だらだろう。僕はある違和感を覚え始める。ここは石巻である。なのに眼前の風景は、それがたとえ松江であつてもちつともおかしなくらいに日常の常だ。終点のJR石巻駅前に到着する。道中から、ガラスの割れた店やコンクリートがめくれあがった舗道を目にしたが、違和感が払拭されたわけではなかった。それほど

に駅は駅として機能していたし、駅前への往来もそれらしく見えた。駅一帯が津波のみに覆われ、完全に水が引くまでには二週間かかったら、あとで柴田さんから聞いたが、その風景を想像してみるのはいし易いことではなかった。

四人は、こちらの避難所からあちらの避難所へと、通行可能な道路をこまめずみのように車で走ってきた。二日目の正午、その風景は突然幾々の前に現れた。海に向かつて道をゆるやかに下っていくと、町が消滅し、人影のなくなった殺伐とした風景が広がった。石巻に来たからにはそれから逃れることはできないと、ある程度の覚悟をしていた風景。僕は、それを目にしたときの心境を表現しようとしてみても、うまく言葉にすることができない。僕はどちらかといこと落ちていた。ただ、その落ちてき方が、いつもの落ちてきている状態とは明らかに違つたのだ。喜怒哀楽を失つてしまったような落着ききでも呼ばばい

いのだろうか。僕が写真を撮つてもいいかと尋ねると、柴田さんは運転しながら「もちろんです。伝えてください、これを」と言った。

前を向いて生きる

それからしばらくのあいだ、車は無言の四人を乗せて、その風景の中を走んで行った。柴田さんが案内してくれたのは、彼の家があつた場所だ。僕たちのほかに、石巻子ども避難所クラブを支援する仙台市内の歯科医のみなさんもいっしょだった。「ここが玄関のあつた場所です」柴田さんがそう言うのと、一回、そこから「お邪魔します」と言つて敷地に入った。そこは北上川の河口にはほど近い場所で、地震直後、川の水がすさまじい勢いで海に向かつて引いていくのを見て、柴田さんは津波が来るのを確信したという。川の彼岸も此岸も、あたり一面、焦土のようである。二〇一一年三月十一日に、ここで起きた事。石巻市、死者三二五〇人、行方不明者八九〇人、全壊一九〇六五棟、半壊三三五四棟、八月一日時点の宮城県

の発表である。柴田さんの家は、ほかの流された家と違つて、なせか床板だけは貞事に残つていた。柴田さんは、なんとその上で昼食を食べよさというのである。私たちは、床板のみの柴田家で輪になつて弁当を広げながら、震災当日の様子について柴田さんから話をうかがつた。柴田さんの口から語られるのは、まさに阿鼻叫喚の地

獄である。津波との生きるか死ぬかの追いかけて、避難した小学校の出火、学校真山への傾斜を渡しての避難、老人や子ども、けが人を背負つての小学校と真山の往復、知らないあいだに自分の体から流れ出る血、壁の向こうに誰かいるのは分かつていても助けられなかった無念さ……。

僕はここで柴田さんの体験をこれ以上書くことはやめようと思つた。石巻子ども避難所クラブのブログにそのことは詳しく書かれているので、できればそちらを読んでいたきたい。僕は柴田さんの話をうかがいながら、その内容もさることながら、彼の語り口に強い印象を受けた。なぜなら、柴田さんは、この上なく重い話を、なにもと飄々と、気負さうことなく語つていたからだ。「二度、死にかけました。彼はそれをまことにまらりと言つてのけたのである。こいつは、つよい。

そう思つた。彼は振り返るだけではない。しっかりと前を向いている人なのだ。そうも思つた。被災してまもない時点から避難所の子どものための支援に立ちあがり、にじろウレシの仲間と共に連日避難所を奔走する彼を支えているものを、僕は見た気がした。

『はじめてのおつかい』と女の子

四人が最後に訪れたのは、柴田さんの高校時代の同級生宅だった。家の壁には、津波が運んだ物がくつきりと付いていた。中に入ると、同級生の男性のお子さんをはじめ、六人の子どもたちが集まつていて、僕はそこで、石巻で初めて読み聞かせらしい読み聞かせをすることになりました。僕は子どもたちの「もつと読んで」という声に応えて、三冊の絵本を立て続けに読んだ。柴田さんも、よかつたですわという表情をしていた。その後、僕と同級生の男性を残して、みなは外に遊びに行き、僕は男性から震災の日のことをうかがつた。「すべてが終わったと思つた」という彼の壮絶な体験の中で、僕はこんな話も聞



■(上段)夕暮れ間近の避難所で読み聞かせをする柴田さんと仲間。(下段)車で移動しながら、いろいろな話を柴田さんからうかがつた。

んな思いでその絵本を聞いていたのだらう。そのことが、少し気がかりだった。石巻行から二ヶ月が経つ。僕はいつもの生活に戻つた。そして、時ど

き、石巻のことを思い出す。僕は石巻に履いていったシューズを帰つてから一度洗つた。しかし、ふとした拍子に、シューズの中から小さな砂が出てくることがある。そんなとき、石巻の子どもたちと汗と砂にまみれて駆け回つたことを思い出す。

それから、夏の青空を見ていると、柴田さんの家の跡地で弁当を広げながら見上げた空を思い出す。そこには清々しく青空が広がっていて、それは、地上のありさまとくらべて、なにか理不尽のようでもあつたし、同時に、おおきな励ましのようでもあつた。いま、石巻にも夏が訪れ、突き抜けるような青空が広がつているのかも知れない。そこに湧いた人達を、ゆつたりと、のんびりと眺めることのできる日が、一日もはやく訪れますように。(いわた・えいさく) 総合文化学科教員*日本近代文学)



■(上段)柴田さんの家の跡には、教えていた子どもの絵が1枚だけ残つた。(下段)柴田さん(右)の家の跡地で話を聞く。

浜田キャンパス学内報告会の概要

○日時：平成23年6月22日（水）16：40～18：10

○場所：浜田キャンパス講堂

○対象：学生、教職員（一般市民の参加可能）

○目的：東日本大震災発生から2か月が経過した状況を災害ボランティア活動に参加した学生が報告し、今後の支援活動の協力要請を行う。

○次第（司会：別枝行夫学部長）

1. 開会あいさつ

島根県立大学 学長 本田雄一

2. 学生からの活動報告

浜田を明るく照らし隊

総合政策学部 2年生 坂本 出

総合政策学部 1年生 谷本由依

島根県災害ボランティア隊

【第2クール】

総合政策学部 3年生 高田昭徳

【第3クール】

総合政策学部 3年生 吉本拓司

【第5クール】

総合政策学部 3年生 高橋勇人

〃 3年生 鬼城博太

〃 3年生 尾崎萌美

〃 3年生 本澤和香

〃 2年生 石川世菜



3. 引率者からの報告

島根県災害ボランティア隊

教務学生課 企画員 松井 健（第2クール）

総合政策学部 教授 井上厚史（第3クール）

4. 今後の支援活動

第12期学友会執行委員会 委員長 堀 将大（3年生）

5. 閉会あいさつ

総合政策学部 学生生活部長 小林 博

東日本大震災に伴う学生ボランティア報告会の概要

○日時：平成23年10月9日（日）13：30～15：30

○場所：浜田キャンパス 大講義室1

○内容：皆様からご協力いただいた学生災害ボランティア支援金により、夏休みに島根県立大学3キャンパスの学生84名が、岩手県で行ったボランティア活動の報告を行うとともに、遠く離れた地から、どのような支援ができるか学生の視点で提案。

○次第(司会:総合政策学部 3年生 仲宗根大輔)

1. 開会あいさつ

島根県立大学 学長 本田雄一

2. 学生からの活動報告

島根県災害ボランティア隊【プランⅠ】

総合政策学部 3年生 鬼城博太

島根県災害ボランティア隊【プランⅡ】

(いわて GINGA-NET プロジェクト)

総合政策学部 3年生 稲元 藍

山口県立大学

社会福祉学部 3年生 藤井友理 (ぷちぼらリーダー)

社会福祉学部 3年生 岑田知沙代

社会福祉学部 1年生 中尾友貴



3. パネルディスカッション (進行:総合政策学部 3年生 堀 将大)

◆テーマ 『輝きに向かって』

～輝くような未来に向かって、今、何が出来るのか～

島根県立大学 (浜田キャンパス)

総合政策学部 3年生 高橋勇人

総合政策学部 3年生 吉本拓司

島根県立大学短期大学部 (松江キャンパス)

総合文化学科 1年生 周藤志織

島根県立大学短期大学部 (出雲キャンパス)

看護学科 1年生 石原 葵

看護学科 1年生 出江加奈子

山口県立大学

社会福祉学部 3年生 藤井友理 (ぷちぼらリーダー)

社会福祉学部 1年生 中尾友貴



4. 今後の支援活動&お礼

第12期学友会執行委員会 委員長 堀 将大 (3年生)

5. 閉会あいさつ

総合政策学部 3年生 高橋勇人

「島根県災害ボランティア隊」松江キャンパス報告会の概要

○日時：平成23年10月21日 午後4時20分～4時50分

○場所：松江キャンパス大講義室

○次第：

1. あいさつ

岸本教務学生生活部長

2. ボランティア活動報告

(1) 報告会の目的

(2) 3月11日の様子（宮城県気仙沼町）と現在の様子

(3) 活動報告

①「島根県災害ボランティア隊」に参加して

総合文化学科 2年 坂本光市郎（プランⅠ第2クール：サブリーダー）

②「いわて GINGA-NET プロジェクト」に参加して

総合文化学科 2年 辻畑裕子（プランⅡ第1クール：サブリーダー）

2年 藤原星子（プランⅡ第3クール）

3. 災害ボランティアに行った体験談

総合文化学科 1年 飯塚裕子（プランⅠ第2クール）

1年 山脇菜摘（プランⅡ第2クール）

1年 周藤志織（プランⅡ第3クール）



出雲キャンパスボランティア報告会・企画コンテストの概要

○主催: 出雲キャンパス地域連携推進委員会

○日時: 平成24年1月18日(水) 13:30～15:30

○場所: 出雲キャンパス大講義室

○対象: 学生、教職員、ボランティア関係団体等



○目的: 出雲キャンパスでは、地域に貢献する学生活動の支援として、ボランティアマイレージ制度を導入し、取り組んでいる。学生による活動報告、ボランティア団体による企画コンテストをとおり、学生のボランティアに対する理解と関心を深めるとともに、学生のボランティア活動を支援する。

○次第(司会: 島根県立大学短期大学部 准教授 高橋恵美子)

1. 開会あいさつ

島根県立大学短期大学部 副学長 山下一也

2. ボランティアマイレージ制度実績報告

3. 学生ボランティア活動報告(災害ボランティアなど5グループ)

①災害ボランティア

島根県災害ボランティア隊【プランⅡ・第2クール】

看護学科 2年次生 小川佐和子

看護学科 2年次生 山根和也

4. ボランティア企画コンテスト(7団体)

5. コメンテーター総評

6. ボランティア企画コンテスト結果発表・表彰



7. 閉会あいさつ

島根県立大学短期大学部 教授 石橋照子

23 文科高第 7 号
平成 23 年 4 月 1 日

各国公立大学長
各公立短期大学長 殿
各国公立高等専門学校長

文部科学副大臣
鈴木 寛

東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について（通知）

このたびの東北地方太平洋沖地震等により被害や影響を受けている大学及び高等専門学校（以下「大学等」という。）においては、被災した学生の修学上の配慮等について、文部科学省から発出した通知等を踏まえ、既に様々な対応を講じていただいておりますこと改めて感謝申し上げます次第です。

今後、災害復旧の進捗状況に応じて、ボランティア活動への参加を希望する学生が出てくることを見込まれます。

学生が、大学等の内外において、学修成果等を活かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の円滑な社会への移行促進の観点から意義があるものであることから、被災地等でボランティア活動を希望する学生が、安心してボランティア活動に参加できるよう、下記の諸点にも配慮して、引き続き学生への指導等をよろしくお願い申し上げます。

記

1. ボランティア活動のための修学上の配慮

ボランティア活動参加者に対し、補講・追試の実施やレポートの活用による学修評価、休学した場合のきめ細かな履修対応などを通じ、学生がボランティア活動に参加しやすい環境作りに配慮すること。

各大学等の判断により、ボランティア活動が授業の目的と密接に関わる場合は、ボランティア活動の実践を実習・演習等の授業の一環として位置付け、単位を付与することができること。

ボランティア活動のため休学する場合、その期間の学費の取扱など学生の便宜のための必要な配慮を図ることが考えられること。

2. ボランティア活動に関する安全確保及び情報提供

ボランティア活動は内容によっては危険を伴うものもあることから、参加する学生に対し事前に安全管理の徹底やボランティア保険等（参考 1「学生ボランティア活動に関わる保険の例」参照）への加入を呼びかけるなど適切な指導に努めること。

被災地における状況や学生ボランティアによる支援要請等に関する情報について、文部科学省ポータルサイト（参考 2「子どもの学び支援ポータルサイト」参照）などを活用しつつ、学生に情報提供を行うこと。

【1. ボランティア活動のための修学上の配慮について】

大学振興課 法規係

電話番号：03-5253-4111（内線 2493）

【2. ボランティア活動に関する情報提供及び安全確保について】

学生・留学生課 厚生係

電話番号：03-5253-4111（内線 2519）

2011年4月21日

学 生 の 皆 様 へ

北東アジア開発研究科長 飯 田 泰 三
総合政策学部 学部長 別 枝 行 夫

東日本大震災に伴う学生のボランティア活動の取扱いについて

本学では、震災後の復興ボランティア活動に積極的に取り組もうとする学生・院生諸君に下記のことをお願いします。

現在も余震の発生が懸念されています。また、ボランティアは被災地側と十分連絡を取った上で、現地に赴くべきですので、あわてて単独の行動などを起こさないようにしてください。被災現地での活動については慎重な計画と受け入れ団体との連携が必要です。本学では学友会と連携して被災地の情報収集に努めており、現地の受け入れ態勢やボランティア要請に関する情報、また島根県内における活動情報を入手次第皆さんにお伝えします。

記

- 1 ボランティア活動への参加を検討している学生は、先ず、ゼミ担当教員の事前了解を得てから、学友会で事前にボランティア登録を行ってください。
- 2 必ず「ボランティア活動保険」に加入してください。保険料は大学が負担します。加入手続きは地域連携推進室（本部棟2階事務室）で行っています。
また、既に参加している人は基本タイプから天災タイプへの切り替えが必要になりますので改めて手続きをしてください。
- 3 大学が認めた学生団体としてのボランティア活動の場合、活動計画について顧問と事前に相談し、指導・助言を受けてください。その後、「学外における課外活動届」を教務学生課（本部棟1階事務室）に必ず事前提出してください。
- 4 ボランティア活動による授業の欠席については、次のとおり取り扱うこととします。
 - (1) 公欠扱いにはなりません。
ただし、修学上の配慮として欠席する各授業担当教員から補習、レポート等の課題が課せられますので必ずその指示に従ってください。
 - (2) 「欠席届」を教務学生課（本部棟1階事務室）に事前提出してください。
- 5 今回の取扱いは東日本大震災に伴うボランティア活動に限定したものとします。

◎公立大学協会調べ：各公立大学の学生ボランティア派遣について ～ 平成23年11月16日付【23公大協第102号】学生の復興支援活動への各大学の取組に関する調査（照会）

（注）公立大学協会提供データを基に、列幅・行高、文字折返、文字網掛部分を加工した

H24. 1. 20現在

No.	大学名	期間	派遣場所	人数(学生)	その他(備考)
1*	札幌医科大学	該当なし			
2	釧路公立大学	該当なし			
3*	公立ほこだて未来大学	該当なし			
4	名古屋市立大学	該当なし			
5*	札幌市立大学	5月21日(土)	岩手県山田町	16名	
		9月7日(水)～13日(火)		学生15名	
		10月2日(日)	岩手県九戸郡	学生17名	
6*	青森県立保健大学	10月30日(日)	岩手県九戸郡	学生4名	
		11月3日(木)		学生6名	
		11月27日(日)	岩手県九戸郡	学生14名	
		12月17日(土)	岩手県九戸郡		
7*	青森公立大学	該当なし			
		3月21日～4月17日	釜石市・陸前高田市	学生延べ250名	
		4月10日	大船渡市・釜石市・大槌町	学生約100名	
		4月11日～4月19日	陸前高田市・大槌町	学生延べ24名	
		4月19日～5月9日	沿岸市町村等	学生延べ約500名	
		4月30日～5月11日	大槌町		
		5月5日～15日	野田村	学生1名	
		6月19日	宮古市	教職員9名 学生8名	
		7月23日	宮古市	学生1名	
		9月24日	大槌町	教職員4名 学生21名 オハイオ大学17名	
8*	岩手県立大学	8月3日～9月20日	沿岸市町村	全国から146大学 1,086名の学生が参加	
		10月1日	宮古市	教職員10名 学生50名	
		11月5日	宮古市	教職員4名 学生9名	
		4月1日～	岩手県沿岸市町村等	教職員3名 学生20名	
		5月21、28日	陸前高田市	教職員延べ43名	
		6月4、11、18、25日		学生延べ53名	
		7月10、18日			
		6月11日	盛岡市	教員1名 学生6名	
		7月9日	盛岡市	教員1名 学生20名	
9*	宮城大学		仙台市・石巻市・南三陸町・亘理町	延べ692名	

No.	大学名	期間	派遣場所	人数(学生)	その他(備考)
10*	秋田県立大学	随時 6月25日(土) 7月18日(土) 11月26日(土)	岩手県宮古市、釜石市、陸前高田市、宮城県気仙沼市、女川町他 岩手県陸前高田市 宮城県気仙沼市	39名 学生延べ314名(システム300名、生物14名) 学生16名 学生13名 学生90名	本学教員が中心となり、秋田大学教員やNPO、市民団体などをつくる「災害ボランティア活動支援ネットワークあきた」を立ち上げた。学生ボランティア団体「UP-A」を中心に、岩手県遠野市「まごころネット」や大船渡市陸前高田市、女川町などのボランティアセンターに登録し、瓦礫の撤去、清掃活動、炊き出しに従事した。 NPO法人・地元企業と連携し、炊き出し支援を行った。 NPO法人・地元企業と連携し、炊き出し支援を行った。 行動力と創造力に富み社会性豊かな人材を育てようとする本学の取組のみならず、薫風・満天フィロソフィア交流塾の一環として、学生・教職員が参加し、炊き出し支援のほか、児童向けの科学教室やコンサートなどを行った。
11*	国際教養大学	11月19日(土)～20日(日)	陸前高田市 気仙沼鹿折地区、大船渡市	学生19名(男性9名、女性10名)	本学と旅行代理店「名産観光」、被災地のボランティア、被災者のボランティア団体「AIU Supporter」の協働で実施する。活動初日は、被災地を訪問し、復興の状況を学習する。2日目はボランティア活動に参加する。
12*	山形県立保健医療大学	該当なし			学生ボランティアサークルの活動について、山形市・西川町あるいは山形県と連携して活動してきた。
13*	福島県立医科大学	該当なし			
14*	会津大学	該当なし			・県設置避難所での活動(会津高校、会津学鳳高校)、炊き出し支援(おにぎり)、ユニクロ支援物資の仕分け作業、橋本町仮設住宅(所在地:会津美里町)への入居支援など ・短期大学部において、特定非営利法人等が連携した「元氣玉プロジェクト実行委員会」が行った炊き出し(おにぎりづくり)への支援
15	茨城県立医療大学	該当なし			
16	群馬県立女子大学	該当なし			
17	群馬県立県民健康科学大学	4月23日(土)24日(日)	岩手県遠野市	学生5名 23日(土)参加学生数49名 24日(日)参加学生数23名	岩手県遠野市ボランティアセンターに5日間参加 群馬県が県民から収集した支援物資の仕分けに、本学学生ボランティアが参加。
18*	高崎経済大学	①7月23日～26日 ②7月27日～29日 ③7月30～8月2日 ④8月4日～7日 ⑤8月4日～7日 別グループ	宮城県石巻市	学生28名 学生28名 学生30名 学生24名 学生30名	受け入れ先:ピースポート災害ボランティアセンター等。石巻市における側溝の清掃作業等実施。
19	前橋工科大学	4月30日(土)	福島県いわき市	学生534名	
20*	埼玉県立大学	H23.9.24～9.27	岩手県陸前高田市	学生約70名 学生10名	津波により甚大な被害にあった観光物産センター「いわき・ら・ら・ミュウ」で泥や油で汚れた調理器具など、がれき撤去を行ってきました。 被災地から埼玉県内(さいたまスーパーアリーナ)に避難されている方にを保育ボランティア等の活動を実施。 埼玉県越谷市社会福祉協議会主催の震災復興支援ボランティア活動に参加
21	千葉県立保健医療大学	該当なし 8月27日～9月8日	岩手県釜石市	学生12名	首都大学東京健康福祉学部の教員3名、学生12名が、8月27日から9月8日までの計11日間3班に分かれて、荒川区社会福祉協議会の協力を得て岩手県釜石市社会福祉協議会釜石市社会福祉協議会釜石市災害支援ボランティアセンターにおいて被災者への支援活動を行った。 主な活動として、仮設住宅周辺での住民の方たちとの交流、血圧測定などによる健康状態の把握、健康に関する不安などに対するアドバイス、ストレス軽減のためのマッサージや被災後の生活上の悩みや被災体験の傾聴等を行った。 (参照) http://www.tmu.ac.jp/activity/awards/4025.html
22*	首都大学東京				
23*	産業技術大学院大学				学生ボランティアセンターの企画運営による被災地ボランティア活動
24	神奈川県立保健福祉大学				
25*	横浜国立大学	該当なし			
26	新潟県立看護大学	これまで該当なし			
27*	新潟県立大学				
28*	山梨県立大学	これまで7回	宮城県気仙沼市	学生延べ40名	宮城県気仙沼市を中心にボランティア活動に参加。学生による子ども学習支援活動など
29*	都留文科大学	該当なし			
30	長野県看護大学	該当なし			
31	富山県立大学	該当なし			
32*	石川県立看護大学				
33*	石川県立大学	該当なし			
34*	金沢美術工芸大学	7月21日～9月15日		延べ11名	現地入り、泥出し、家具・量等の運び出し、瓦礫の分別等を行った。
35*	福井県立大学		陸前高田市	学生26名	福井県内の高等教育機関で構成する大学連携リーグによる東日本大震災ボランティア派遣の実施。

No.	大学名	期間	派遣場所	人数(学生)	その他(備考)
36*	岐阜県立看護大学	該当なし			
37	情報科学芸術大学院大学	該当なし 3月14日から1週間 3月25日から5週間	岩手県山田町 宮城県石巻市・気仙沼市	2名(社会人学生) 学生3名 学生8名 学生3名(延べ人数)	静岡県社会福祉協議会ボランティア 静岡県ボランティア協会の派遣 静岡県社会福祉協議会ボランティア
38	岐阜薬科大学				
39*	静岡県立大学	4月27日(水)～8月13日(土)のうち3回 5月12日(木)～9月26日(月)のうち14回 8月17日(水)～8月23日(火)	岩手県大槌町・陸前高田市・釜石市 岩手県大槌町・陸前高田市・釜石市 岩手県大槌町・陸前高田市・釜石市	学生21名(延べ人数) 学生7名	静岡県ボランティア協会の派遣 岩手県立大学学生ボランティアセンターが中心となって進める「いわてGINGA-NETプロジェクト」へ参加。
40*	静岡文化芸術大学	3月27日(日)～31日(木) 5月2日(月)～6日(金)	宮城県石巻市 宮城県石巻市	学生4名 学生4名	
41*	愛知県立大学	①8月24日～30日②9月14日～20日	岩手県大槌町・釜石市、大船渡市、陸前高田市等	①学生20名(男性5名、女性15名) ②学生57名(男性17名、女性40名) (内愛知県立芸術大学の学生①2名②2名)	震災直後より、学生の有志が復興支援のための実行委員会(SUAC For Japan)を立ち上げ、ボランティア活動に精通した教員の助言の下、様々なボランティア活動、チャリティ活動を行っている。
42*	愛知県立芸術大学				
43*	名古屋市立大学	①5月27日～6月4日 ②10月1日～4日 ③11月4、5日 ④7月13日～7月17日 ⑤9月14日～9月20日	宮城県仙台市青林区、宮城県石巻市 宮城県石巻市 岩手県陸前高田市 岩手県陸前高田市気仙町 宮城県石巻市	経済学部2名 芸術工学部1名 芸術工学部1名 芸術工学部1名 経済学部1名 看護学部1名	2日～5日間、民家や田んぼのガレキ撤去、泥かき等を行う 期間中7日間、草き出し、ガレキ撤去。 期間中2日間、損壊した家財やベドロ等の撤去、仮設住宅での支援活動など。 2日間、ガレキ撤去。 期間中3日間、ガレキ撤去。 期間中5日間、仮設住宅でのサロン活動、子供向けの学習支援・遊び支援、お祭り等地域行事の開催支援等
44*	三重県立看護大学	8月24日～30日	岩手県大槌町・釜石市、大船渡市、陸前高田市、住田町等	学生他30名	いわてGINGA-NETプロジェクトと連携して、本学学生を被災地に派遣してボランティア活動を行う。活動内容は、仮設住宅でのサロン活動、子供向けの学習支援、遊び支援、お祭り等地域行事の開催支援等。
45*	滋賀県立大学	5月連休 8月	南三陸町志津川 南三陸町歌津地区	8名 学生33名	災害復興支援ボランティア活動 宮城大、滋賀県大の教員、滋賀県大の学生合わせて6名
46*	京都府立大学	8月19日(金)～8月22日(月) 11月11日(金)～11月14日(月)	宮城県気仙沼市 宮城県東松島市	学生1名 学生1名	「復興プロジェクト」として番屋を建設した。 いわてGINGA-NETプロジェクト参加 7人 東日本大震災で被災した地域の復興支援のため、岩手大学の学生が中心となって行うプログラムに参加する。 災害復興支援ボランティア活動 4人増(8人→12人)
47*	京都府立医科大学	3月～6月 7月24日～27日	宮城県石巻市 宮城県気仙沼市	1名 1名	がれき撤去、泥かき、避難所での中高生への勉強への支援等 がれき撤去
48	京都市立芸術大学				

No.	大学名	期間	派遣場所	人数(学生)	その他(備考)
60*	国立広島大学	6月18日～7月3日 夏期休業期間中		1名 3名	単位付与、履修への配慮などの特別措置なし(欠席扱い) ボランティア活動。集中講義(5月)受講、主催団体の証明及びレポート評価により単位付与 12/2現在 単位付与を行った学生数:追加・変更なし(計3名) (単位付与の対象でない)学生数:6名追加(計7名)
61*	広島市立大学	4月～9月	宮城県石巻市、岩沼市、南三陸町 岩手県陸前高田市	9名	日本財団、広島市社会福祉協議会等が実施するボランティア活動に参加し、学校・民家の泥かき、がれきの撤去、表札作り、起業インターンシップ、朝市販売業務の手伝い、避難所における話相手、避難所での生活支援、支援物資の配分、七夕祭りの準備等を行った。
62	尾道大学	該当なし			
63	福山市立大学	5月末、6月末	宮城県・岩手県	学生15名	授業科目「地域実習」において、学生を派遣する東日本大震災復興支援活動プログラムを立ち上げ(従来の8プログラムに新たに追加)、学生と教員を派遣。2回目の派遣の際、宮城県内の小学校に、ハンコン5台を提供した。現地での活動は、瓦礫撤去作業・避難所巡回補助・ニーズ調査補助・足湯とハンドマッサージ・お茶会等。NGO団体(SVA)の指導・助言のもとで、地元企業の社会人とともに現地で活動を行った。現在は、「あんでネット」のサポートに加わり、仮設住宅等で女性グループが作成するアクリルたわしを山口で周知・販売する活動を行っている。
64*	山口県立大学	4月29日～5月2日 4月19日～現在	岩手県	学生2名 学生30名	学生ボランティア代表2名を、岩手県立大学災害ボランティア活動拠点(気仙郡住田町)の派遣し、絵本配布作業、写真洗浄作業、炊き出し作り作業等に加わった。 若手県立大学社会福祉学部と連携し、同大学が実施している震災ボランティアネットワーク事業(GINGA-NET)に協力するが、学生ボランティア活動を継続的に育成する予定。内容は、若手県立大学の学生ボランティアセンターの学生の招聘、担当教員の招聘。夏休み等における「GINGA-NET」を窓口とする被災地支援ボランティアへの参加、宮古市唐仁地区における、地域の運動会(村おこし)などの実施支援ボランティアへの参加。学生による災害ボランティアサークル「YU勇氣」の活動支援。 学生による災害ボランティアサークル「YU勇氣」を組織。当サークルでは、被災地への絵本の寄贈、手作りシジュンクの香腸、防犯ブザーの収集と寄贈を実施したほか、派遣学生を中心とする事前学習会や事後の報告会を実施した。また、派遣先におけるコミュニケーションツールとして「ハンドマッサー」の技法を研修し、さらに山口県内における災害啓発セミナー等における被災地の状況報告と募金活動をおこなっている。
65*	下関市立大学	8月31日～9月8日	岩手県陸前高田市	学生3名	学生ボランティア3名を、山口市のボランティア団体「じゃがいも会」の主催する災害ボランティアに参加派遣した。視覚障害のある被災者支援、巻下校児童の防犯支援(車バト)補助、瓦礫かたづけ等の作業に従事した。
66	香川県立保健医療大学	9月14日～9月20日	岩手県南宮治厚地域	学生7名	学生ボランティア4名が、地域のボランティア団体「山口災害救援」の救援活動に参加し、互理町の仮設住宅における「まごころバケツ・プロジェクト」配布、ならびに「肩もみ、ハンドトリートメント」活動を実施した。
67*	愛媛県立医療技術大学	8月4日(木)～12日(金) 8月4日～12日 9月19日～25日	宮城県山元町、岩手県大槌町、南三陸町、岩手県大槌町	学生2名、卒業生1名 学生5名、卒業生1名	復旧活動等のボランティア活動 本学の東日本大震災支援活動の一環として、学生の被災地でのボランティア活動を支援した。宮城県山元町、南三陸町では、現地災害支援ボランティアセンターの活動に参加し、岩手県大槌町では、生活支援活動を行った。
68*	高知県立大学	該当なし			
69*	高知工科大学	6/11-6/13 10/5-13	石巻市、女川町 仙台市	学生11名 学生1名	愛媛大学と合同で研究調査とボランティアを行った。 家族と共に参加した。
70*	九州歯科大学	該当なし			
71*	福岡女子大学	該当なし			
72*	福岡県立大学	9月中旬	宮城県南三陸町	18名	被災地での支援活動。
73*	北九州市立大学	該当なし			
74*	長崎県立大学	該当なし			
75*	熊本県立大学	該当なし			
76*	大分県立看護科学大学	該当なし			
77	宮崎県立看護大学	該当なし			
78*	宮崎公立大学	該当なし			
79	沖縄県立芸術大学	該当なし			
80	沖縄県立看護大学	該当なし			
81*	名桜大学	該当なし			

島根県災害ボランティア隊について

平成 24 年 2 月 7 日
島根県社会福祉協議会

島根県災害ボランティア隊の派遣概要

- 島根県社会福祉協議会では、ボランティアの確保が困難となる連休明けの平成23年5月9日から、県民を対象とした「島根県災害ボランティア隊」を編成し、計6回にわたり石巻市へ合計144名のボランティアを派遣した。
- その後、岩手県の被災地域からのボランティア派遣要請と県民からのボランティア参加の要望が引き続きあることを踏まえ、このボランティア隊を再度編成し、8月の盆明けから計5回にわたり合計128名のボランティアを派遣した。
- 引き続き、宮城県南三陸町の災害ボランティアセンターからボランティアの派遣要請が寄せられたため、10月中旬から2回にわたりボランティア隊を派遣した。

第1期（宮城県石巻市）

派遣期間	派遣場所	派遣人数	活動内容
5/ 9～5/13	竹浜地区	21名	全壊家屋の片付け・瓦礫の撤去
5/16～5/20	渡波地区	29名	家屋の清掃・アパートの泥出し
5/23～5/27	水明地区	28名	アパートの泥出し・公園の整地
6/ 6～6/10	大街道地区	20名	家屋の清掃と泥のかき出し
6/13～6/17	住吉地区	21名	寺院の清掃・側溝の泥出し
6/20～6/24	住吉地区	25名	側溝や花壇の泥出し
派遣人数合計		144名	

第2期（岩手県陸前高田市等）

派遣期間	派遣場所	派遣人数	活動内容
8/17～8/21	広田地区	29名	瓦礫の撤去・草刈り
8/17～8/23	住田町他	14名	高齢者のサロン活動・子どもの学習支援
8/24～8/28	小友地区	29名	牡蠣の殻と瓦礫の分別作業
8/31～9/ 6	住田町他	27名	高齢者のサロン活動・子どもの学習支援
9/14～9/20	住田町他	29名	高齢者のサロン活動・子どもの学習支援
派遣人数合計		128名	

第3期（宮城県南三陸町）

派遣期間	派遣場所	派遣人数	活動内容
10/12～10/16	戸倉地区	23名	漁具の整備・瓦礫の撤去
10/19～10/23	伊里前地区	28名	全壊家屋の片付け・瓦礫の撤去
派遣人数合計		51名	

派遣ボランティア内訳（男女別・年代別）

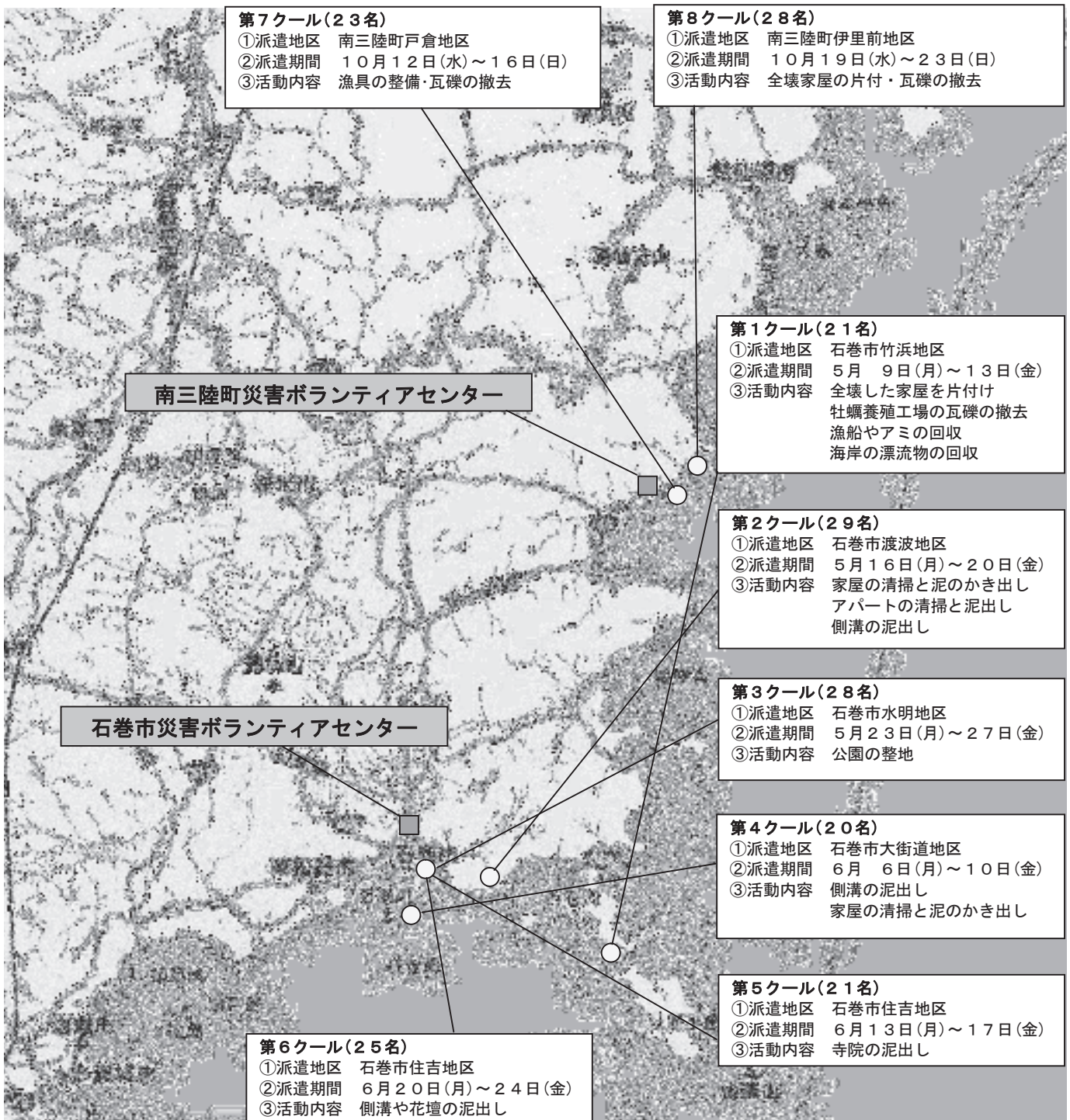
派遣者数	男性	女性	10～20代	30～50代	60代以上
323名	207名	116名	185名	108名	30名

「島根県災害ボランティア隊」派遣概要

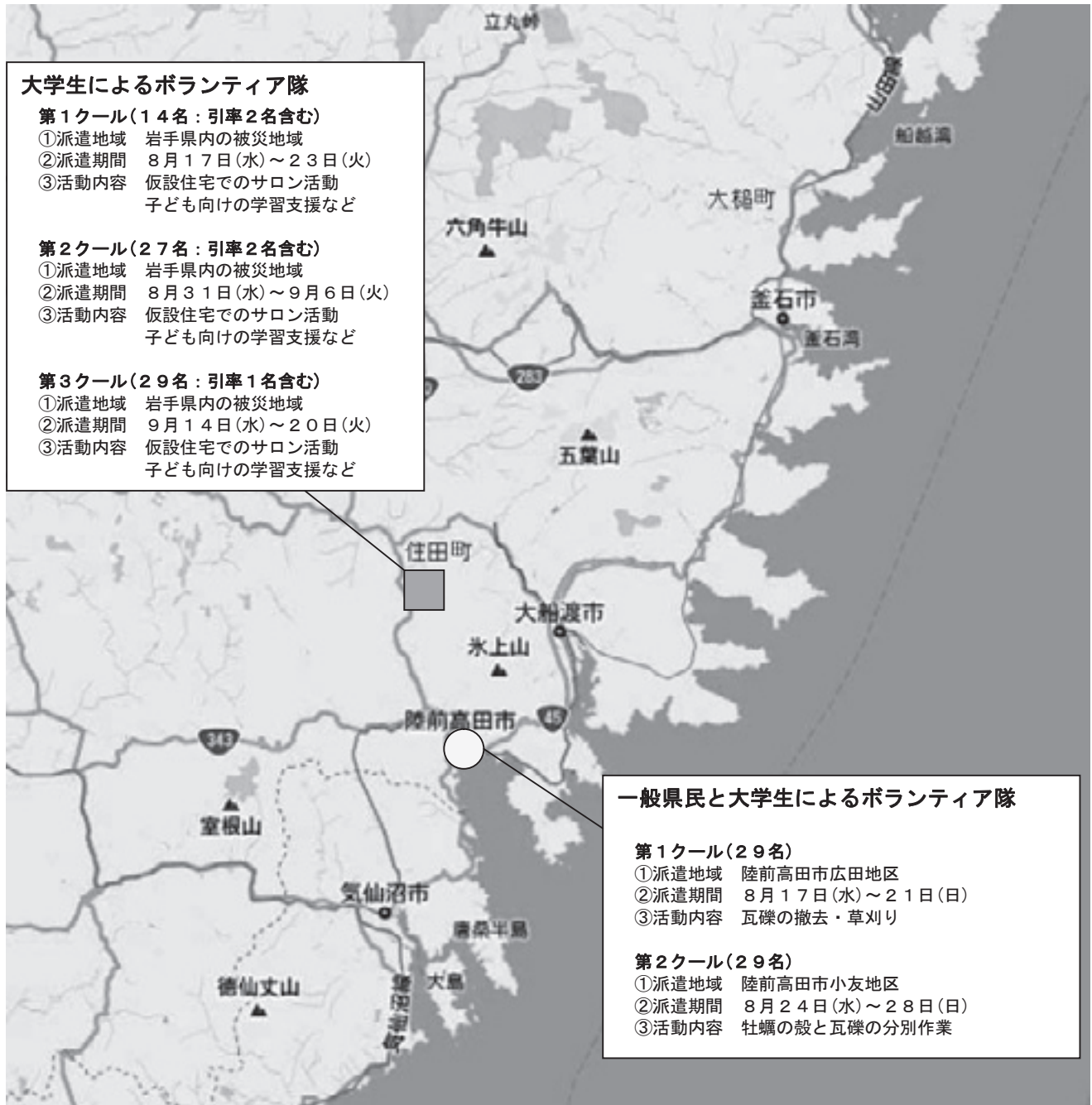
1 概要

- 島根県社会福祉協議会では、ボランティアの確保が困難となる連休明けの平成23年5月9日から、県民を対象とした「島根県災害ボランティア隊」を編成し、計6回にわたり石巻市へ合計144名のボランティアを派遣した。
- その後、岩手県の被災地域からのボランティア派遣要請と県民からのボランティア参加の要望が引き続きあることを踏まえ、このボランティア隊を再度編成し、8月の盆明けから計5回にわたり合計128名のボランティアを派遣した。
- 引き続き、宮城県南三陸町の災害ボランティアセンターからボランティアの派遣要請が寄せられたため、10月中旬から2回にわたりボランティア隊を派遣した。

2 宮城県での活動状況



3 岩手県での活動状況



4 派遣状況

派遣人数	性別		年代別		
	男	女	10代～20代	30代～50代	60代～70代
323名	207名	116名	185名	108名	30名

災害ボランティア活動に参加される方へ

1 東日本大震災の被害の概要

- (1) 平成23年3月11日14時46分頃に発生
- (2) 震源は三陸沖。震源域は、岩手県沖～茨城県沖にわたる
- (3) 地震の規模を示すマグニチュードは9.0。
1900年以降、世界で4番目の規模。地震エネルギーは、阪神・淡路大震災の数百倍～千倍とみられる
- (4) 最大震度7(宮城県北部)。震度6以上は、宮城県、福島県、茨城県、栃木県、岩手県、群馬県、埼玉県、千葉県に及ぶ
- (5) 高さ10m以上の大津波を各地で観測
- (6) 多くの余震が続いている。当面、余震の発生とそれによる津波の発生に注意する必要がある
- (7) 死者15,847名、行方不明3,306名、計19,153名(警察庁・平成24年2月9日現在)
- (8) 地震の名称は、当初、気象庁が「平成23年東北地方太平洋沖地震」と決定していたが、4/1国会閣議で「東日本大震災」とされた。

2 被災地に着いたら

- (1) 現地災害ボランティアセンターの指示のもとに活動します。
 - ① 被災地に入る場合は、必ず現地災害ボランティアセンター(VC)に登録をします。
* 災害ボランティアセンターは、都道府県及び市町村の社会福祉協議会が中心となり、地域の諸団体と協力して設置します。この度の東日本大震災でも、同様に各市町村に設置されています。
 - ② 災害ボランティアセンター(VC)では、地域のボランティアニーズの収集、ボランティアの受入れ、ボランティアの行き先の調整を行います。また、ボランティアの安全衛生管理を行うとともに、活動に必要な用具の貸出しを行う場合もあります。
- (2) 地域での活動のルールを学ぶ
 - ① 余震による津波警報・注意報の発令に備え、活動場所が決まったら、周辺の高台の避難場所を現地の災害ボランティアセンター(VC)に確認します。
 - ② 地域の特徴や状況について、VCの説明をよく聞き理解します。
 - ③ 被災された方との接し方には留意すべきことや不可欠な配慮もあります。VCの説明を聞くとともに、次ページをよく理解してください。
 - ④ 南三陸町では、写真やビデオ撮影はできません。

3 被災された方々と接するにあたっての心構え

- (1) 復旧や復興の主役は被災された方です。ボランティアはそれをサポートする存在であるという原則を忘れないように心がけてください。
- (2) 水・食料・常備薬・適切な服装・保険等の必要な備えをするなど自己責任・自己完結が原則です。被災された方・被災地に負担をかけないことが求められます。
- (3) 仲間とよく話し合い、一人で仕事を抱えこまないようにしてください。また、単独での行動は避けるようにしてください。
- (4) 被災された方に頼まれても、自分や周囲を危険に巻き込むような仕事は引き受けないでください。(隊長の指示を仰いでください。)
- (5) 被災された方の立場をできるだけ理解し、自分の判断を押しつけるようなことは避けてください。また、必要以上に自分の経験や考えを振りかざすことは避けてください。

ボランティアにとって最も大切な視点

「被災された方の目線で考える」

例えば…… 「被災地」ではなく「地名」、「がれき」ではなく「ご自宅」
「ゴミ」ではなく「家財」

ふとした一言が相手の心を温かくもすれば傷つけることもある。

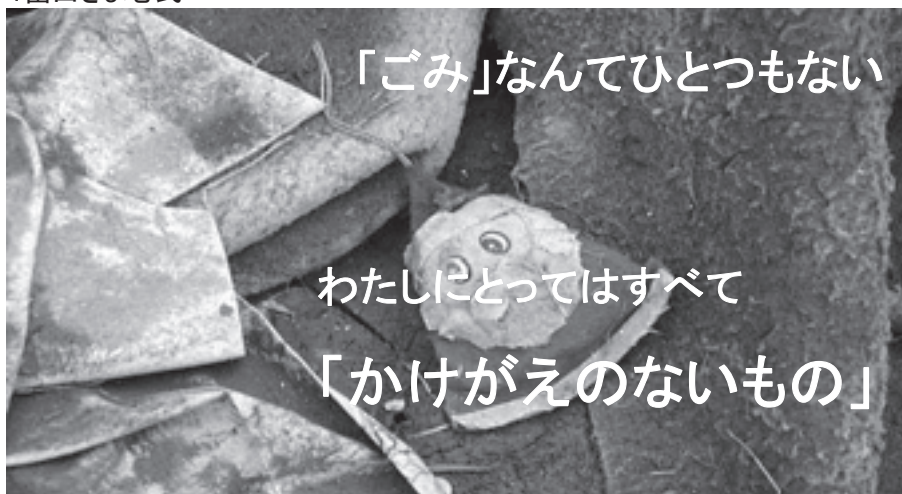
ふとした一言が相手の心を温かくもすれば傷つけることもある。





上: 写真提供: エフエム・プランニング

下: 富田きよむ氏



4 安全衛生の心構え

- (1) 体調管理に努めてください。体調が悪い時は、必ず隊長に報告してください。
- (2) 被災地における緊急連絡先を事前に確認してください。
- (3) 現地に着いても、すぐに活動を始めず、危険な場所がないかを確認してください。
- (4) 活動中、適宜休憩をとります。隊長の指示に従い必ず休んでください。また活動中に体調に異変が生じた場合は、決して無理をせず、速やかに隊長に報告してください。
- (5) 活動中の飲酒は禁止です。
- (6) 活動が終わったら、手洗い・うがいを徹底してください。
- (7) ヒヤッとした経験をした場合は、隊長をはじめ周囲の参加者に報告してください。
- (8) 活動を通じて知らず知らずのうちにストレスが生じることもあります。活動した仲間との1日の振り返りや親しい人と話をするなど、意識的に一人で抱えこまないように心がけてください。

災害ボランティア活動中の健康管理

2012. 2

① 肺炎予防

津波が運んだヘドロの粉塵を吸い込んで重い肺炎を発症する例が増えています。粉塵には肺炎などを起こす化学物質や発がん性物質のアスベスト（石綿）が混入している危険性があります。

- ・ 防塵用マスクの着用する。 * 防塵マスクを事前に用意してから現地へ向かうように。
- ・ 作業後はうがいをする。

② 破傷風予防

破傷風とは、破傷風菌が作る毒素により、激しい筋肉のけいれんが起こる病気です。

さびたり汚れている物体によって受けた切り傷や、釘を踏んで受けた深い刺し傷などが原因となります。破傷風の予防接種がありますが、免疫は一生続きません。一連の初回の接種後、追加接種を過去5年間以内に受けていない場合はワクチンを打ちます。

- ・ 厚手のゴム手袋や長靴使用する。
- ・ けがをしたら綺麗な水で傷を洗い、必ずボランティアセンターに報告する。

③ 感染症予防（インフルエンザ、感染性胃腸炎が流行しています。）

- ・ うがい、手洗い、マスク着用
- ・ インフルエンザ予防接種をする。

④ エコノミー症候群（静脈血栓塞栓症）

乗り物の座席などに長時間ずっと同じ姿勢の状態になっていることで、足の血液の流れが悪くなり、静脈血栓という血のかたまり（血栓）ができてしまい、血管が塞がれてしまう状態です。

- ・ 長時間にわたって同じ姿勢を取らない。時々下肢を動かす。
- ・ 水分補給をする。（血液粘度の観点からイオン飲料が効果的）
 - * アルコール飲料や緑茶・紅茶・コーヒーなどカフェインを含む飲み物は利尿作用があり、かえって脱水を引き起こす恐れがあるので水分補給目的としては避けたほうが良い。

⑤ 体調管理

長時間の移動の後は、がれき撤去や泥かき等の重労働になると思われます。

過労や睡眠不足にならないように健康管理に注意することが大切です。

（2次災害が起こらないようにするのもボランティアの心構えです。）

- ・ 疲れたら休憩し無理をしない。
- ・ 食事、水分、睡眠をしっかり取る。
- ・ 手洗い、うがいを行う。
- ・ 常備薬を持参する。
- ・ 天候を考え、衣服の調整をする。（防寒対策）
- ・ 健康保険証を持参する。

⑥ メンタルヘルス 別紙参照

震災支援活動をしたいと考えている方へ

～心理的観点から気をつけること～

学休期間に、震災支援のボランティアなどの活動をしたいと考えている人は、少なからずいらっしゃると思います。すでに日常の中でできる活動をしている人もいらっしゃるでしょう。

人の役に立ちたい、自分の力を誰かのために有効に使いたいという気持ちは、尊いものだと思います。その志を実現していくために、真に被災された方の役に立ち、また同時にあなた自身にとって有意義な体験となるよう、活動前・活動中・活動後の全体を通して、自分自身で、あるいは仲間と一緒に、いろいろと考えたり話し合ったりしてみましょう。学生相談室からは、心理的観点からの情報をお伝えします。

【支援する側になるときに注意すること】

- ☆ 活動にあたってまずは、自分自身の健康と安全に責任を持つことが大事です。
- ☆ ボランティアにはさまざまな種類の活動があります。自分にあった活動を選び、無理のないようにしましょう。
- ☆ 現地に行く場合や、被災された方に直接接して支援を行う場合は、以下のような心理的知識を持つことでストレスに備えてください。

<惨事ストレス>

悲惨な状況の現場で、過酷な任務にあたる場合、以下の項目のような心身の反応が現れることがあります。これらは「惨事ストレス」と呼ばれるストレス反応です。救急隊、医療関係者、心理カウンセラー、報道関係者などの職業専門家でも、厳しい現場で強いストレスにさらされると起こりえます。

<二次受傷>

被災者をケアする支援者もまた、上記のようにストレスを受けます。悲惨な出来事、つらい体験の話を知ると、聞き手も精神的打撃を受け、下記のようないろいろな反応が起こることがあります。これは「二次受傷」と呼ばれます。

<異常な事態に対する正常な反応です>

災害の現場でストレスを受けない人はいません。それにより何らかの反応が起こるのはむ

しる当然のことです。自分だけは大丈夫と過信してはいけません。ストレス反応と対処法について知ることで、ストレスに備えましょう。

<ストレスチェック項目>

- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 現場の光景が突然、繰り返し目に浮かぶ | <input type="checkbox"/> 睡眠のリズムが乱れる |
| <input type="checkbox"/> 悪夢をみる | <input type="checkbox"/> 食欲不振、食べ過ぎる |
| <input type="checkbox"/> 胃腸の調子がわるい | <input type="checkbox"/> お酒やタバコが増える |
| <input type="checkbox"/> だるさ、強い疲労感がある | <input type="checkbox"/> 気分がすぐれない |
| <input type="checkbox"/> 憂うつ、気が滅入る | <input type="checkbox"/> 強い無気力感や悔しさを感じる |
| <input type="checkbox"/> 強い罪悪感や自責感を持つ | <input type="checkbox"/> 落ち込みやすい、悲観的になる |
| <input type="checkbox"/> 涙もろくなる | <input type="checkbox"/> 興奮気味、ずっと緊張している |
| <input type="checkbox"/> じっとしてられない | <input type="checkbox"/> いらいら、怒りっぽくなる |
| <input type="checkbox"/> ミスが増える | <input type="checkbox"/> もの忘れがひどい |
| <input type="checkbox"/> 周囲から冷遇されていると感じる | <input type="checkbox"/> 自分が偉大なように思えてしまう |
| <input type="checkbox"/> 仲間やリーダーを信頼できない | <input type="checkbox"/> 人を責めたくなる |
| <input type="checkbox"/> 人と付き合いたくなくなる | <input type="checkbox"/> 発疹が出る |

<支援者のストレス対処法>

- ① 活動にあたっては謙虚に、自分にあまり大きな期待を持ちすぎないようにする。
- ② ストレスの兆候が現れたら、自分の気持ちやストレスに感じていることを素直に認める。
- ③ 自分の感じていること・体験したことを人に話す。仲間と話し合う。
- ④ リラックスを心がける。
- ⑤ 食事と休養をよくとる。お酒やタバコは控える。
- ⑥ 周囲の制約や、自分自身の限界を知り、無理をしない。
- ⑦ 自分だけで何とかしようと気負わず、仲間と声をかけ合いながら、協力して活動する。
- ⑧ ときどき仕事から離れ、体を伸ばしたり、深呼吸したりして気分転換する。
- ⑨ 自分の活動を振り返る。記録を書いたり報告したりすることは、自分のした活動を振り返り、気持ちを整理するのに役立つ。
- ⑩ 自分の行動をポジティブに評価する。自分の成長を褒める。

※ これらの対処法で処理しきれない負担を感じる場合は、リーダーや責任者に相談してください。また専門家への相談も考えましょう。

<参考文献>

『災害時のこころのケア』 2004年 日本赤十字社

『災害時の「こころのケア」の手引き』 2008年 東京都福祉保険局

がれきの処理における留意事項

～ がれき処理作業を行う皆様へ ～

地震・津波により倒壊した建物などのがれきの処理は、釘等を踏み抜いたり、倒れてきたり落下してきた物に当たるなど、多くの危険を伴います。

本リーフレットは、がれきの撤去等作業にあたって安全に作業を進めることができるよう、がれきの処理における留意事項をまとめたものです。

作業の実施にあたっては、作業責任者の指示によく従って行動するとともに、本リーフレットを参考に安全に十分注意して作業を行ってください。

1 災害に遭わないための服装

- 長袖の作業着など肌の見えない服装で作業しましょう。
- ヘルメットや安全靴など底の厚い靴、丈夫な手袋を着用しましょう。
- 防じんマスクやゴーグルを着用しましょう。
- 防じんマスクの使用にあたっては、使用前に漏れがないか確認するためのフィットチェック（4頁目参照）を必ず行いましょう。



2 安全な作業のための準備

- 作業を開始する前に、作業責任者が誰か確認し、その方の指示を受けて作業を行いましょう。
- 周りで作業を行っている人に危険が及ぶことのないよう、連絡を取り合い、十分注意して作業を実施しましょう。
- がれきを運搬するための経路を確保しましょう。



3 作業中に注意すべき事項

がれきの処理の際

- 安定の悪い**がれき**の上など高い所で作業しないようにしましょう。
- 倒れそうな建物には近づかないようにしましょう。
※地震に被災した建物は、丈夫そうに見えてもダメージを受けています。
- 重いものを無理に一人で運ぶのはやめましょう。
- 倒れた柱などの長尺の**がれき**を運ぶときは、周りに人がいないか十分注意しましょう。
- 薬品（液体）の容器や、液漏れした機械を見つけた場合には作業責任者に連絡しましょう。
- 古いトランス、コンデンサー等でP C Bが含まれているものが工場に保管されていることがあります。特別な管理が必要なものですので不用意に触らないようにしましょう。
- 石綿が含まれているおそれのある建材については、散水等によりできるだけ湿潤化するとともに、原則、割らずに片付けましょう。
- 作業中の重機（ブルドーザー、パワーショベル等）に近づかないようにしましょう。

荷積みの際

- トラックなどへ**がれき**を積む際は「積み過ぎ」に注意しましょう。
- トラックの荷台の上の**がれき**には乗らないようにしましょう。

その他の留意事項

- 緊急地震速報が出た際には作業を中止して安全な場所に避難しましょう。
- 夏場など暑い時は、水分、塩分、休憩をこまめにとりましょう。
※体調が悪くなった場合は、作業を直ちに中止し、すぐに作業責任者にその旨を伝えましょう。
- 粉じんが舞うような場所で飲食や喫煙をしないようにしましょう。
- 汚水、雨水、海水、河川の流水、腐敗しやすい物が溜まっている箇所などは酸素濃度が低かったり、硫化水素濃度が高い可能性があります。立ち入らないようにしましょう。
- 破傷風の危険があるので、傷を負った場合は、すぐに消毒・治療をしましょう。
- 火災等により**がれき**が燃焼している場合には、風上に立ち、燃焼中の**がれき**に近づかないようにしましょう。燃焼後の**がれき**を片付ける際は、防じんマスクを着用しましょう。

いわて GINGA-NET プロジェクトとは

■開催趣旨

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、死者・行方不明者は二万五千人を越える大きな被害をもたらしました。避難所や応急仮設住宅で暮らす数多くの避難者の方の生活を支えるためには、長期的に様々な支援が必要です。

一方、この未曾有の被害に対し、力なりたいという学生も数多くおり、また大学等も夏季休暇に向けて、学生の活動を応援しようという機運も高まっていました。

こうした被災地の要支援ニーズと学生のボランティアニーズを効果的に結びつけるために「いわて GINGA-NET プロジェクト」は結成されました。

具体的には、岩手県南部沿岸地域にアクセスのよい住田町を宿泊拠点として、岩手県内各地でのボランティア活動に参加する仕組みを、ネットワークを組んで進めていこう、という取り組みです。

企画・運営にあたっては、岩手県立大学学生ボランティアセンターが、県内のボランティア活動プログラム開発、マッチングや宿泊サポートを、ユースビジョン及びさくらネットが、全国の大学ボランティアセンター、および学生ボランティア推進団体と連携して、学生ボランティアの募集、送り出しを行いました。

■実施概要

- ・活動期間：7月27日（水）～9月27日（火）の9週間
（一般参加者募集期間は、8月3日から9月20日までの7週間。）
- ・参加規模：1週間単位で毎週100～150名程度。
- ・活動地域：大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、住田町ほか
- ・活動内容：仮設住宅でのサロン活動、子ども向けの学習支援、遊び支援、地域行事の開催支援等
- ・実施主体：いわて GINGA-NET プロジェクト実行委員会
 - ・岩手県立大学学生ボランティアセンター
[ボランティア活動プログラム開発、マッチング、現地活動サポート]
 - ・ユースビジョン、さくらネット
[大学等へのよびかけ、資金調達、現地サポート、ボランティア受入仕組みづくり]
- ・財 源：参加者参加費の他、募金、企業協賛金、助成機関からの助成金。

■実行委員会構成団体

岩手県立大学学生ボランティアセンター

2007年に発生した新潟中越沖地震の復興支援ボランティアを契機に、翌2008年に学内にボランティアセンターを設立。現在、約50名のスタッフを主体に、地域からボランティア依頼の対応や、学生への活動紹介のほか、プロジェクトチーム方式で、地域の課題に対応した活動を行っている。

3月11日に発生した東日本大震災においては、釜石市、陸前高田市の災害ボランティアセンターの運営支援や、週末ボランティア企画の運営など、学生を主体に様々な活動を行っている。

特定非営利活動法人 さくらネット

阪神淡路大震災の経験、教訓をもとに、災害にも強い福祉のまちづくり事業、くらしの充実に向けたNPOと自治体との協働事業等を通じ、課題解決への意志が花ひらくような、個人とコミュニティの関係づくりに取り組む兵庫県西宮市のNPO。

今年4月、5月の2回、「いわてっこ応援！学生ボランティアバスプロジェクト」を実施し、100名を超える関西の大学生たちを岩手県でのボランティア活動へ送り出しました。

特定非営利活動法人 ユースビジョン

阪神淡路大震災を契機に高まった学生のボランティア活動のムーブメントを、一過性ではなく、地域、社会に根付かせていくため、1996年に学生有志で設立した「きょうと学生ボランティアセンター」が前身。ボランティア活動を通して多くの学生と地域を結ぶ活動を展開。2005年に名称変更。現在、NPOへのインターンシップや就職支援など活動の幅を広げつつ、大学ボランティアセンターの設立や運営の支援、学び合いの機会づくりなどにも取り組んでいます。

社会福祉法人 岩手県社会福祉協議会（地域福祉企画部 ボランティア・市民活動センター）

岩手県社会福祉協議会は、岩手県における社会福祉事業その他の社会福祉を目的とする事業の健全な発達及び社会福祉に関する活動の活性化により、地域福祉の推進を図ることを目的とする民間の団体です。東日本大震災以降は、岩手県内の災害ボランティアセンターと連携して、復興支援ボランティアのコーディネート役を担っています。

いわてGINGA-NETプロジェクト活動報告

説明会

いわてGINGA-NET各地で説明会

日時	地域	会場	協力団体	参加者数
6月11日 土	大阪	龍谷大学大阪梅田オフィス	龍谷大学	60名
6月12日 日	東京	明治学院大学	明治学院大学	25名
6月18日 土	名古屋	日本福祉大学名古屋キャンパス	日本福祉大学	25名
6月19日 日	静岡	静岡県総合社会福祉会館「シズウエル」	静岡県社会福祉協議会	7名
6月26日 日	岡山	岡山県ボランティア・NPO活動支援センター「ゆうあいセンター」	岡山県ボランティア・NPO活動支援センター	29名
7月6日 水	神戸	神戸親和女子大学三宮サテライトキャンパス	神戸親和女子大学	13名

名古屋



神戸



スケジュール

■全体スケジュール

- 第1期 7月27日(水)夜間～8月 2日(火)午前 (現地拠点準備期間)
- 第2期 8月 3日(水)夜間～8月 9日(火)午前
- 第3期 8月10日(水)夜間～8月16日(火)午前
- 第4期 8月17日(水)夜間～8月23日(火)午前
- 第5期 8月24日(水)夜間～8月30日(火)午前
- 第6期 8月31日(水)夜間～9月 6日(火)午前
- 第7期 9月 7日(水)夜間～9月13日(火)午前
- 第8期 9月14日(水)夜間～9月20日(火)午前
- 第9期 9月21日(水)夜間～9月27日(火)午前 (現地拠点撤収期間)



■1週間のスケジュール(車中泊2日、住田町4泊)

○●現地での活動スケジュール●○

2日目	
6:30	
7:00	応援バス、独自バス
7:30	9:00までに五葉公民館着、荷物整理
8:00	
8:30	
9:00	
9:30	
10:00	五葉公民館出発
10:30	五葉公民館→沿岸地
11:00	
11:30	
12:00	沿岸地視察(途中、昼食)
12:30	
13:00	
13:30	沿岸地→入浴施設
14:00	
14:30	入浴施設にて入浴
15:00	
15:30	入浴施設→五葉公民館
16:00	
16:30	オリエンテーション
17:00	
17:30	
18:00	
18:30	夕食
19:00	
19:30	
20:00	
20:30	
21:00	チーム交流会
21:30	
22:00	
22:30	就寝準備
23:00	消灯、就寝
0:00	

3～5日目	
6:30	
7:00	起床
7:30	朝食・朝のオリエンテーション
8:00	
8:30	五葉公民館→活動地域(バス移動)
9:00	
9:30	
10:00	
10:30	
11:00	
11:30	
12:00	各地域で活動(途中、昼食)
12:30	
13:00	
13:30	
14:00	
14:30	
15:00	
15:30	
16:00	活動終了 活動地→入浴施設
16:30	
17:00	
17:30	入浴施設にて、入浴、夕食
18:00	
18:30	入浴施設→五葉公民館
19:00	
19:30	
20:00	振り返りの会、明日の準備
20:30	
21:00	
21:30	交流の時間
22:00	
22:30	
23:00	就寝準備
23:30	消灯、就寝
0:00	

6日目	
6:30	
7:00	起床
7:30	朝食・朝のオリエンテーション
8:00	
8:30	五葉公民館→活動地域(バス移動)
9:00	
9:30	
10:00	
10:30	
11:00	
11:30	
12:00	各地域で活動(途中、昼食)
12:30	
13:00	
13:30	
14:00	
14:30	
15:00	活動終了 活動地→入浴施設
15:30	
16:00	入浴施設にて、入浴
16:30	
17:00	
17:30	入浴施設→五葉公民館
18:00	
18:30	夕食
19:00	
19:30	
20:00	解散式
20:30	
21:00	
21:30	プログラム終了
22:00	
22:30	バス出発
23:00	※出発地によっては翌朝出発するバスもあります
23:30	
0:00	

主な活動のご紹介

お茶っこサロン

応急仮設住宅にお引越してきた方々とお茶を飲みながら、お菓子を食べながら、引越した後の住民間の新しいご近所づきあいを築くお手伝いを行いました。

初めて行く場所では、机や椅子、お茶セットなどを積み込んで、場所の設営から始めます。

その後は、お茶っこサロンを訪れてくれた方々にお茶を出て話をしたり、子どもたちと外で遊ぶなどを実践。場所や訪れてくれる方々の様子によってサロンの内容は柔軟に変更します。



復興風鈴～りんりん隊～



岩手の暑い夏を風鈴の音色で緩和し乗り越えてもらうため、応急仮設住宅で暮らしている方々などに南部鉄器風鈴を送ります。また、この震災の復興へ協力してくれている人々の気持ちを短冊に乗せ、世界に一つだけの風鈴を作ります。

また、配布時には、応急仮設住宅を一軒一軒訪問していくので、そこで暮らしている方々のボランティアニーズの発見や、高齢者の安否確認にもつながる活動です。

南部鉄器風鈴は本当に素敵な音色です♪

子どもの遊び支援(大槌町)

大槌町社会福祉協議会主催の「わくわく子供広場」をお手伝いします。子供たちのストレス発散の場としても期待されています。遊びのお兄さん、お姉さんとして活動しました。



道クリーン【通称:道クリ】(釜石市)

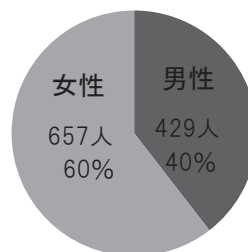
例年行っている両石地区でのお祭りを今年も開催できるように、神社までの道の清掃活動を行いました。向き合うものは「モノ」であっても、住まれていた方々の想いを大切に活動します。

参加者数

	男性	女性	合計
第2期	52	20	72
第3期	30	35	65
第4期	80	112	192
第5期	60	102	162
第6期	81	120	201
第7期	57	136	193
第8期	69	132	201
全体	429	657	1086

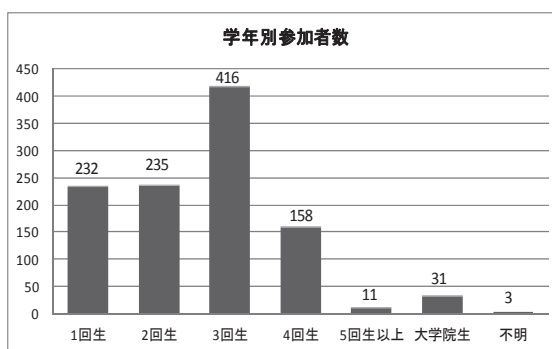
単位(人)

全体男女比



■ 学年別参加者数

学年	人数(人)	割合
1回生	232	21.4%
2回生	235	21.6%
3回生	416	38.3%
4回生	158	14.5%
5回生以上	11	1.0%
大学院生	31	2.9%
不明	3	0.3%



団体参加大学

活動期	日程	参加大学 (大学単位のパス参加)
第1期	7/27-8/2	現地拠点開設準備
第2期	8/3-8/9	前橋医療福祉専門学校
第3期	8/10-8/16	明治学院大学
第4期	8/17-8/23	神戸親和女子大学/島根県立大学/北星学園大学/明治学院大学/大学コンソーシアム八王子
第5期	8/24-8/30	愛知県立大学/宇都宮大学/関西大学/三重県立看護大学/立命館大学政策科学部/日進市社会福祉協議会
第6期	8/31-9/6	川崎医療福祉大学/大阪大学/島根県立大学/日本福祉大学/豊田看護大学/北星学園大学/しがNPOセンター
第7期	9/7-9/13	京都文教大学/四国大学/青森県立大学/大阪府立大学/藤女子大学/立命館大学サービスラーニングセンター
第8期	9/14-9/20	愛知県立大学/島根県立大学/東海大学/立命館大学サービスラーニングセンター
第9期	9/21-9/27	現地拠点撤収

参加大学一覧

※団体参加大学含む

【近畿地方】

□大阪府(11校,143人)

大阪大学/大阪府立大学/大阪市立大学/関西大学/常磐会学園大学/関西外国語大学/大阪経済大学/大阪女学院大学/大阪女学院短期大学/大阪樟蔭女子大学/近畿大学

□京都府(15校,187人)

立命館大学/京都文教大学/京都文教短期大学/京都精華大学/龍谷大学/同志社大学/花園大学大学院/京都橘大学/京都産業大学/京都大学/京都外国語大学/京都光華女子大学/佛教大学/京都大学大学院/京都工芸繊維大学大学院

□兵庫県(13校,80人)

神戸親和女子大学/神戸大学/武庫川女子大学/武庫川女子大学短期大学部/神戸市外国語大学/甲南大学/関西学院大学/甲南女子大学/流通科学大学/神戸常盤大学/園田学園女子大学/神戸女子大学/神戸学院大学

□滋賀県(4校,17人)

滋賀大学/滋賀県立大学/びわこ成蹊スポーツ大学/滋賀医科大学

□奈良県(1校,1人)

帝塚山大学

□三重県(2校,21人)

三重県立看護大学/三重大学

【中国地方】

□岡山県(7校,39人)

川崎医療福祉大学/岡山大学/岡山理科大学/美作大学/ノートルダム清心女子大学/吉備国際大学/岡山県立大学

□広島県(5校,16人)

県立広島大学/広島市立大学/広島国際大学/広島工業大学/広島大学

□鳥取県(1校,1人)

鳥取大学

□島根県(4校,65人)

島根県立大学/島根リハビリテーション学院/島根県立大学短期大学部/島根大学

□山口県(1校,7人)

山口県立大学

【中部地方】

□長野県(1校,1人)

八ヶ岳中央農業実践大学校

□岐阜県(1校,2人)

朝日大学

□福井県(2校,6人)

仁愛大学/福井県立大学

□静岡県(2校,9人)

静岡英和学院大学/静岡県立大学

□愛知県(18校,179人)

愛知県立大学/愛知県立芸術大学/名古屋商科大学/名古屋学芸大学/稲山学園大学/日本福祉大学/日本赤十字豊田看護大学/名古屋短期大学/名古屋大学/名城大学/愛知淑徳大学/中京大学/愛知大学/豊橋創造大学/愛知教育大学/金城学院大学/南山大学/名古屋市立大学

【四国地方】

□徳島県(1校,25人)

四国大学

□愛媛県(1校,1人)

愛媛大学

【九州地方】

□福岡県(2校,2人)

北九州市立大学/福岡教育大学

□大分県(1校,2人)

大分大学

□宮崎県(1校,1人)

航空大学校

【北海道・東北地方】

□北海道(3校,36人)

北海道大学/藤女子大学/北星学園大学

□青森県(1校,15人)

青森県立保健大学

岩手県立大学
(岩手郡滝沢村)

五葉地区公民館
(気仙郡住田町)

【関東地方】

□東京都(40校,162人)

東京工業大学/サレジオ工業高等専門学校/帝京大学/都立北多摩看護専門学校/東洋大学/法政大学/明治学院大学/立教大学/学習院女子大学/青山学院大学/中央大学/日本大学/文教大学/共立女子短期大学/成蹊大学/一橋大学/東京電機大学/大東文化大学/国際基督教大学/実践女子大学/武蔵野美術大学/創価大学/多摩美術大学/東京純心女子大学/明星大学/ヤマザキ学園大学/首都大学東京/東京工科大学/東京造形大学/杏林大学/東京薬科大学/拓殖大学/桜美林大学/大妻女子大学/東京女子大学/白百合女子大学/慶應義塾大学/専修大学/明治大学/早稲田大学

□神奈川県(4校,17人)

東海大学/横浜国立大学/東洋英和女学院大学/神奈川大学

□茨城県(1校,3人)

筑波大学

□栃木県(1校,11人)

宇都宮大学

□群馬県(1校,36人)

前橋医療専門学校

□千葉県(1校,1人)

千葉大学

笑顔呼ぶ 学生の熱意

熱い思い続々と。

全国から学生ボランティアを受け入れる県立大の「いわてGINGA INETプロジェクト」が、参加学生数のピークを迎えている。

「被災地出身」「阪神大震災の経験が忘れられない」などさまざまな動機で集まった学生たちは、被災者に少しでも元気を与えようと活動に励んでいる。

約150大学1300人が連携わりで本県に駆け付け、仮設住宅の住民の交流促進などに努めるプロジェクト。80人だった参加者が200人規模に膨らんだ19日、学生は1チーム5〜15人に分かれ、大槌町や釜石市など5市町に向かった。

県立大受け入れピーク

150大学から1300人



トランプを使ったマジックで仮設住宅に住む高齢者らを楽しませる学生ボランティア＝釜石市

被災者と膝交え交流

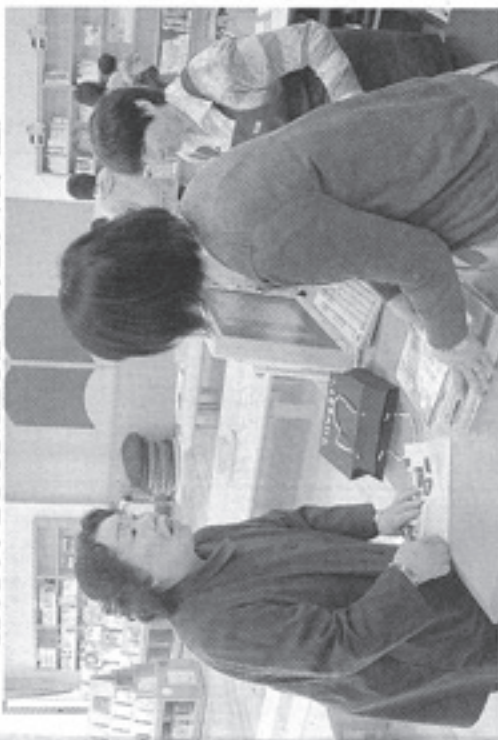
大坂府で阪神大震災 阪神が重なった。何か2年の金野奈緒子さんに参加しているが、それを経験した島根県立大 しなければと思った」(19)は「自分は被災地出身だが、被災者では付いたことを大切にしたい」と願う。

福島県出身で静岡県立大4年の先崎明宏さん(22)は「親戚が津波で流された。就職したら東北には戻らないので少しでも恩返しをしたい」と語った。

釜石市の仮設住宅の談話室で交流した菊池忠王さん(74)は「震災当時は何も考えられなかった。学生さんが来てくれて笑えるようになったことほほほ笑んだ。

県立大4年の松本唯美さん(21)は「みんなさまざまな思いを持って

被災地の子どもたちへ送る絵本を手渡す市民(左)



「子どもたちの心」支援

被災地に送る絵本収集開始

「子どもたちの心」支援
被災地に絵本を送る活動を開始する大阪府陸奥市天(奈良県)の児童学

科の神村明佳講師(28)に
協力し、県立大総合文化
学部の酒田英作教授(48)
が収集を計画。松江キャンパスにある絵本専門の

県立大短期大学部松江
キャンパス(松江県丹波市十白)の教授らが20
日、東日本大震災の被災
地に送る絵本の収集を始
めた。4月末に第1便を
被災地に届け、震災でシ
ョックを受けている子
どもたちの心が和むよう
支援する。

県立大短期大学部松江

図書課へ受け付けを始
めた。
午前10時に開始する
と、市民が訪れ、同課の
司書に持参した絵本を託
した。中には一人で3冊
持ち込む人もいたなど、
この日、50冊を収集。ゆ
っくりな動きではかたさ
れながら、でこぼこ道を
平らにしながら車み、感
謝されていく車を夫大公
にした
「このま
なろう

絵本を提供した同市一
の谷町の主婦岡山美恵
子さん(57)は「震災で
子どもたちは遊び道具
を失っている。少して
も喜んでもほしい」と話し
た。

県立大生入福島で ボランティア活動へ

島根県立大学(浜田市
野原町)の学生7人が東
日本大震災の被災者を支
援するボランティア活動
に参加するため、日、福
島県いわき市へ出発した
。写真。現地の状況など



を情報収集し、後に続く
同大生ボランティアに伝
える目的もあり、帰郷後
の12日午後8時半から、
同市黒川町の石見公民館
で学生や市民に報告す
る。
当初は浜田市と交流の
ある高城郡石巻市へ向か
う予定だったが、震災事
故の影響で福島県内でボ
ランティアが不足してい

るという情報を
聞き、行き先を
同県いわき市に
変更。現地では、
被災家屋の片付
けや支援物資の
受け入れ作業な
どを予定する。
同市殿町の市役
所駐車場で見送
りの同大生や市民ら約20
人が駆けつけ出発式があ

り、兵庫県から合流する
人を除く6人がぞうい
の特製Tシャツを着て集
合。リーダーの桐野大さ
ん(20)は「メンバーはい
ずれもボランティア経験
がないが、気付いた点を
まとめ今後の参考にした
い」と話した。
今回の活動費は、同大
生と市民でつくる「浜田
を明るく賑わし隊」が製

作した特製Tシャツの収
入金を使って補助。
同隊によると、既に初回
製作分の100着は完売
し、予約分などを含めると
300枚を販売できる
見込みという。同大生の
後援組は、早ければ23日
に被災地へ向かう。県社会
福祉協議会のボランティア
隊に参加する。



島根県災害ボランティア隊を継続する意義を説く、第2陣の参加者＝松江市東津田町、県松江合同庁舎

**島根ボランティア隊
第2陣宮城から帰県
県社協継続検討へ**

東日本大震災の被災地の復興支援のため、島根県社会福祉協議会が県民を対象に募り、派遣した「災害ボランティア隊」第2陣が20日、帰県した。参加者からの要請を受け、県社協は現在、第3陣までを予定する同隊の継続の検討に入る。第2陣は松江、益田両市や隠岐の島町などの18、68歳の29人で編成。宮

城県石巻市で18日から1日間、被災家屋の後片付けや泥の排出作業などにあたった。松江市内であった解団式で、参加者は被災地でのボランティア数の減少を懸念する一方、自身の問題には希望者が多いと指摘。災害ボランティア隊を続ける意義を説く声に、県社協の細木裕三常務理事は第4、5陣への新たな編成を前向きに検討すると応じた。石巻市在住の長男と大震災後の2週間、連絡が

取れず、その後に無事が確認された出雲市荒茅町の運送業、曾田和彦さん(56)は「発生から2カ月がたつのに、これだけしか復興が進まないか」というのが、現地でも感じた正直な思いと話した。

**避難施設の現状
県立大生が報告**

県田 ボランティア従事

大震災がもたらした
東日本大震災の被災地、避難所となる公立大学(県田市野野町)の学生たちが14日、田中川町の石原茶屋



「ボランティア従事者」の報告が不足していること、冷めた場所やおぼろげな食事、十分な食事が満足に取れないことなど苦痛を訴えて、報告した。避難所生活が長期化するなか、必要だと訴えた。

で報告会を開いた。野田、田中川町の公立大学(県田市野野町)の学生たちが14日、田中川町の石原茶屋で報告会を開いた。野田、田中川町の公立大学(県田市野野町)の学生たちが14日、田中川町の石原茶屋で報告会を開いた。

報告会には、リタイアした同大の学生が、田中川町や野野町の住民約800人が生活する避難所の現状を説明した。

支援の在り方考える

県立大で「キャンドルナイト」

鳥取県立大（浜田市野原町）のサークル・地域活動部でこねっと（中野裕香部長、20人）がこのほど、同大で「キャンドルナイトー一期いー」と題したイベントを開いた。学生や教職員、市民ら約80人が参加し、東日本大震災の被災地で復興に向けたボランティア活動に当たった学生の発表を通して被災地支援の在り方を考えた。



被災地支援の在り方について意見交換する部員

【浜田】被災地活動 学生が報告

とらねるとは、学生有志が被災地の復興支援を目的に今年8月、鳥取県日本大震災の被災地に活動の拠点を設け、被災地支援の募金活動や、被災地への物資支援などを行うことを目的とした。約100名の学生が参加した。被災地支援の在り方について意見交換する部員

東日本大震災

被災地支援の在り方について意見交換する部員

長期的な取り組み訴え

県立大生 被災地の活動報告

大震災 広がる支援

東日本大震災の被災地に赴き、ボランティアで復興支援に当たった鳥根

県立大生らの活動報告会が22日、浜田市野原町の同大であった。学生らは



石巻市でのボランティア活動の様子を報告する鳥根県立大生

被災の爪痕が残る現地の様子を伝え、被災した学生や市民ら約500人が、継続的な支援の必要性を再認識した。同大では、市民グループ・浜田を明るく照らす

隊に所属する学生が5月上旬に福島県郡山市の避難所などで活動。5月中旬から8月下旬にかけては、学生や教職員が県社会福祉協議会のボランティア隊の一員として、宮城県石巻市で家の清掃を行うなど、延べ約50人が支援活動に従事している。報告会では、学生ら約40人が「家の中に大量の腐敗した魚があり、悪臭が漂っていた」など、現地の様子を報告。そのうえで、「ボランティア数はここに来て減少傾向にあるが、復興は今からが正念場。長期的な復興支援が重要になる」とボランティア活動の役割を指摘した。

助け合いの大切さ実感

災害
支援
県立大生招き報告会



県立大の学生（左側）から災害ボランティア体験の報告を聞く住民たち

川本町川下の三島自治会（前田保広会長）は、このほど、地区内の三島管理棟で、東日本大震災の災害ボランティアを体験した県立大生（浜田市野原町）の学生を招いた報告会を開催。現地で活動した学生の話を聞き、災害の恐ろしさや助け合いの大切さをあらためて実感した。

自治会は、1883（昭和8）年7月の豪雨災害で3人の死者を出しており、被害を繰り返さないように毎年実施している防災訓練に合わせて企画。同4年の下浦

舞子さん（20）と、いずれも2年の小川千尋さん（19）、本田拓也さん（18）が住民約40人の前で発表した。3人は宮城県石巻市に6月21日から3日間滞在して体験したボランティア活動について「ペドロなどがたくさん残っており、大変な作業だった」「ボランティアには、多くのボランティアの方がまだまだ必要と感じた」と報告。発表を聞いた同町川下、町議員森川和友さん（50）は「現場の過酷な状況がよく分かり、災害の悲惨さがあらためて分かった」と話した。県立大の学生は、夏休み期間中にも被災地へボランティアに訪れる予定で、自治会は活動への支援金を出している。

島根県立大の23人 ボランティアへ出発

岩手で活動

夏休みを利用して、東日本大震災で被災した岩手県内でボランティア活動に取り組む島根県立大生（浜田市野原町）の学生の出発式が17日、同大であった。岩手、秋田、山形、宮城の3キャンパスから学生や教職員計23人が参加し、がれき処理や子どもへの学習支援に当たる。

県立大生の被災地へのボランティア参加は6回目。今回は県社会福祉協議会の震災復興ボランティ

ア隊に参加した。同隊は学生を含む県民から募るがれき処理班と、学生のみを対象に仮設住宅で子どもへの学習支援にあたる班の2班で構成。がれき処理班は今回を含め8月末までの2



回、学習支援班は9月中旬までの計3回活動される。

出発式には被災地に行く浜田キャンパスの学生や教職員ら約30人が出席。本田雄二学長は「被災者の生活再建のため尽力してほしい」と激励した。

今回、学生たちは浜田市職員らからボランティア活動費として5万円の寄付を受けしており、3年の隈城博志さん（21）は「大学や市の協力のおかげでボランティアに取り組める」と感謝した。

大震災からあす8カ月



ボランティア生活支援軸に

島根県社福協 ニーズ変化に対応 派遣隊

東日本大震災の被災者へ11月8日、派遣隊のみなさんが一泊して支援活動を行いました。震災発生から8か月、被災者への支援活動は、被災者だけでなく被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。

被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。

被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。

ボランティアの活動は、被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。被災者の生活の質を向上させることにも注力しています。

被災地で支援の県立大生 活動ふりや感想報告

東日本大震災の被災地へ4月に赴きボランティアで活動した県立大(浜田市野原町)の学生が、浜田市長を訪問し、市から活動資金50万円の寄贈を受けたことについて報告した。

被災地へ4月に赴きボランティアで活動した県立大(浜田市野原町)の学生が、浜田市長を訪問し、市から活動資金50万円の寄贈を受けたことについて報告した。

被災地へ4月に赴きボランティアで活動した県立大(浜田市野原町)の学生が、浜田市長を訪問し、市から活動資金50万円の寄贈を受けたことについて報告した。



宇津島市長(左)に、被災地でのボランティア活動への支援に対し感謝の意を伝える本田雄一学長(右)

被災地でのボランティア活動への支援に対し感謝の意を伝える本田雄一学長(右)



公立大学法人島根県立大学のシンボルマークの説明

松江市、出雲市と浜田市からともに飛翔する総合大学は、知性と感性に輝き、教育と研究の輪を広げます。

豊かな日本海の藍青は未知の世界、発見の海へ乗り出す学問の探求を、県の木・黒松の緑は、育まれる豊かな人格の育成を表し、生命輝き人間愛に満ちた暁を聞く茜とともに、総合大学としての島根県立大学の発展を象徴しています。

発行 2012年3月

公立大学法人 島根県立大学

島根県立大学(浜田キャンパス)

〒697-0016 島根県浜田市野原町 2433-2

TEL：0855-24-2200 FAX：0855-24-2208

島根県立大学短期大学部(松江キャンパス)

〒690-0044 島根県松江市浜乃木 7-24-2

TEL：0852-26-5525 FAX：0852-21-8150

島根県立大学短期大学部(出雲キャンパス)

〒693-8550 島根県出雲市西林木町 151

TEL：0853-20-0200 FAX：0853-20-0201